



Title	中村哲医師メモリアル・アーカイブのグラフィックデザイン
Author(s)	工藤, 真生; 伊原, 久裕; 池田, 美奈子
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86321
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中村哲医師メモリアル・アーカイブのグラフィックデザイン

工藤 真生・伊原 久裕・池田 美奈子 九州大学



図1 ガラススクリーンと円柱形年表

はじめに

30年以上にわたり、アフガニスタンとパキスタンで医療・人道支援に尽力し、2019年12月に銃弾に倒れた中村哲医師の志を次世代に伝える「中村哲医師メモリアル・アーカイブ」が、2021年3月に九州大学中央図書館内に設置された。メモリアル・アーカイブは、中村医師の著作を収集・デジタル化して保存・公開する「著述アーカイブ」と、物理的な空間としての「展示空間」から構成されている。

後者の「展示空間」は、映像を映し出すスクリーンと音響システム、展示用什器などのプロダクト、そして本稿の主題であるグラフィックから成るスペースデザインで、図書館の利用者である学生や教職員らが、中村哲医師の活動を体感し、著述アーカイブにアクセスするエントランスの役割を担っている。本稿では、この展示空間のために制作したグラフィックデザイン、特に(1)ガラスス

クリーン、(2)円柱形年表、(3)リーフレットの3作品に焦点を当てて説明する。

ガラススクリーン

展示空間と図書館の閲覧室を区切る大きなガラススクリーンは、閲覧室からの視認性が高く、来館者の注意を展示スペースへと向けるメディアとなりうる。そこで、遠くを見つめる中村医師の横顔とヒンドークシュ山脈を配し、中村医師がアフガニスタンで見た景色や思い描いた世界へのタッチポイントとした。山脈の下には、中村哲医師の著書から引用した6つの文章を閲覧室側から読めるように配置した。引用したのは、九州大学の様々な学部の学生たちが数ヶ月にわたる読書会を通して、中村医師の著書のなかから議論を重ねて選んだフレーズである。雄大な山脈を背景に、中村医師が大所高所から学生たちに語りかけるかのように、縦組みでゆったりとレイアウトした。



図2 ガラス面に配された中村医師の言葉

展示空間内部の突き出しガラスにも学生が選んだ7つの文章を配置した。閲覧室側のガラススクリーンに配した中村医師の大局的な視点の言葉とは対照的に、内部の突き出しガラスには中村医師の迷いや自らを奮い立たせようとする内面的な言葉を長めに引用し、観者が近づいて文章を味わえるように、目の高さに合わせ小さいフォントで配置した。

円柱形年表

展示空間内の角柱に覆いを取り付けて円柱形にし、中村医師の生誕から死までの出来事を写真とともに螺旋状に配して一連の物語として生涯をたどれるようにした。円柱は古代より物語を後世に伝えるメディアとしての役割を担ってきた。存在感のある円柱の上部には「中村哲医師メモリアル・アーカイブ」のロゴタイプを配し、エントランスから入ってきた来場者の視線を瞬時に捉えアーカイブの中へ誘導することを狙った。来場者は円柱を巡りながら視線を下から上へと滑らせ中村医師の生涯を体感する。円柱には、中村医師の業績を次世代に語り継ぐモニュメントとしての意味合いも付与した。

リーフレット

メモリアル・アーカイブに関する広報と情報提供を目的として、折りたたんだ状態で片手に収まるサイズの縦長のリーフレットをデザインした。

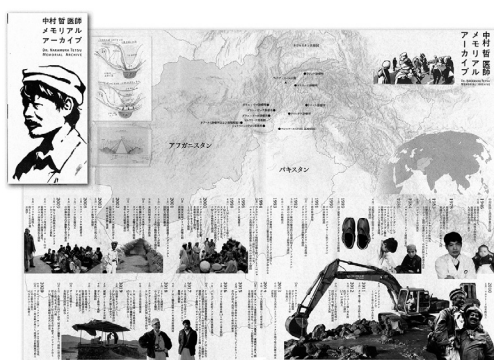


図3 リーフレット

アーカイブの設立趣旨や経緯、著作アーカイブおよび展示空間の概要をわかりやすく解説するとともに、中村医師の志と活動に対する包括的な理解を促せる資料性も重視する必要があると考え、中村医師らの活動をアフガニスタンの地図上にプロットし、年表を並べて掲載することで、出来事が起こった場所と時を紐づけて理解できるようにした。解説的なコンテンツは冊子のようなページ進行が読みやすく、地図と年表は俯瞰できることが効果的だと考え、解説的な文章を表面に、地図を背景に年表を裏面にレイアウトし、A2サイズの紙を二つ折りしてさらに蛇腹に折りたたむことで、表面はページをめくりながら読めるようにし、裏面は広げることでポスターのような大きな紙面上で地図と年表が一望できる構造にした。中村医師の写真は全てモノクロ切り抜きにして、年表の中に配置し、テキストと写真が一体的に目に入るようにした。

まとめ

メモリアル・アーカイブにおけるグラフィックデザインの目的は、来場者に、中村医師のメッセージをリアルに届けて共感と探究心を呼び起こすタッチポイントの創出である。そこで、それぞれのグラフィックにおいて観者あるいは読者の身体的な動きのなかに情報を組み込み、さらなる行動を促すように意図して制作した。